



by Mr. Bonzai
translated by Atsunori Asao

Kitaro's Sacred Journey

喜多郎 シンセの名人がたどる空海の遍路

作曲家、ミュージシャンとしてグラミー賞やゴールデン・グローブ賞を受賞している喜多郎。彼が2003年に制作をスタートさせた『空海の旅』シリーズは約1,100年前に仏教の聖人、空海が四国の88カ所の寺を巡った遍路の旅をテーマにした作品群だ。各寺の鐘の音を収録し、その音を使用した88曲、全10枚のアルバムを完成させようとする壮大なプロジェクトである。現在まで58カ所の

寺の鐘をレコーディングし、24曲が完成しているこのシリーズ、第3作となる『空海の旅 3』が先月発売された。私はこのアルバムのミキシング作業が行われたロサンゼルススタジオ、オーシャン・ウェイ・レコーディングと、ツアーに向けてリハーサルが行われていたセンター・ステージを訪れ、本作の制作過程やツアーの使用機材などについて話を聞いた。

今でもシンセの録音には アナログ・テープ・マシンを使用

現在まで喜多郎は58の寺の鐘を録音し終わっている。残る寺の数は30。24番から31番までの寺をまとめたシリーズ3作目である本作の作曲について喜多郎は次のように語ってくれた。

「カリフォルニアにある私のスタジオには、シンセサイザーからアコースティック楽器、大太鼓やティンパニに至るまで、必要なものがほとんどすべてそろっています。作曲しているときにはそのすべてを手に取り、曲にぴったり合ったサウンドを選ぶようにしているのです。いろんな実験をして曲のアイデアに最適なサウンドを見つけ、そこからさらに曲を深めていきます。曲作りにはあらゆる楽器を使う可能性があるわけですが、メインは古いアナログ・シンセです」

カリフォルニアにある喜多郎のスタジオでは、24trのアナログ・テープ・マシンとDIGIDESIGN Pro Tools | HDの両方を使って、シンセサイザーやアコースティック楽器がレコーディングされた。その後、それらの素材と四国の寺で録音した鐘の音などが、ハリウッドのオーシャン・ウェイ・レコーディングでミックスされたそうだ。オーバーダブ用シンセのレコーディングも2人のエンジニア、スティーヴン・ミラーとイアン・ユリバーリがオーシャン・ウェイ・レコーディングで行い、アルバム全体のミックスはNEVE 88Rを使いミラーと喜多郎自身が手掛けた。喜多郎のプライベート・スタジオのエンジニアでもあるユリバーリが、今回使われた新しいテクノロジーの幾つかを解説してくれた。

「喜多郎はEAST WESTのバーチャル・インストゥルメント、Quantum LeapシリーズのSymphonic Choirsを使っている。これにはWord Builderというソフトが付属していて、MIDIキーボードをプレイすることで、自分がタイプした言葉をSymphonic Choirsのサウンド・ライブラリーに歌わせることができる。『空海の旅3』ではこれを使用していて、今度のツアー用に購入したAPPLE MacBook Proにもインストールしてありライブでも使っているよ。また、本作のクールな点は



photo by Mr. Bonzai

LEXICON 224XやPCM80といった古い機材が重要な役割を果たしていることだが、一方で喜多郎はプラグインのSOUNDTOYS EchoBoyも気に入っているんだよね。レコーディングでは、ギタリストを参加させることもあるが、そうでないときは喜多郎がエレクトリック・シタールを使い、ROGER LINN DESIGN AdrenaLinn III や EchoBoyなどで複雑で面白いリズム・テクスチャーを作り出したりしている。このシステムでは、エフェクトごとに違ったアクセントをつけたり、好きなようにチューニングしたりできるんだ。その結果、曲に合ったクールなパルスが生まれる。ちなみに、『空海の旅 3』の大半はPro Tools|HD3の192 I/Oでまとめたけれど、喜多郎は今でもシンセの録音にはアナログ・テープを使っていて、そのサウンドは素晴らしいものだ」

『空海の旅 3』の仕上げについては、エンジニアのスティヴン・ミラーが説明してくれた。

「ミックスにはデジタルとアナログ両方のテクノロジーを組み合わせて使っている。Pro Toolsをレコーディング・メディアとして使い、すべてのトラックを個々のチャンネルカステレオ・サブミックスのどちらかで、88Rに立ち上げてミックスしたんだ。どうすれば各トラックのフィーリングが良くなるかを考慮して、Pro Tools内のいろんなEQやコンプなどのプラグイン、それに88RのEQやコンプ、さらにはビンテージ・アウトボード類を組み合わせて使った。EQならLANG、SONTEC、PULTEC、コンプならUNIVERSAL AUDIO 1176、TELETRONIX LA-2A、DBX 165、FAIRCHILDなどだ。私が求めているような深みを生み出すため、コンソールは過去に手掛けたアルバムと同じようなセッティングにした。例えば、マーク・アイシャムの『ヴェイパー・ドローイングス』やマイケル・ヘッジズの『Aerial Boundaries』などだ。喜多郎の224Xも含む5〜6種類のリバーブを使い、それらを全く異なったディレイ・タイム、ディフュージョン、初期反射レベルなどにセットした。また、それぞれ異なるイコライジングとディレイ・

イ・タイムにセットしたモノラルのディレイも用意した。これらは個々のバス・センドから送られるので、各ディレイをどのリバーブにも送ることができ、またドライ・シグナルにできることを考えると、膨大な量の選択肢からアンビエントを選べるわけだ。また、オーシャン・ウェイ・レコーディングで行った喜多郎のシンセのオーバーダブでは、私の作業の流れを断ち切らずに喜多郎が実験できるように、極めてシンプルなシステムにした。ミックス・ダウン用とは別のルームにDIGIDESIGN MBox 2 Proと、彼のノート・パソコンに接続したハイグレードのマイクプリを置いたんだ。彼が満足のいくトラックを完成させると、私の方はその新しいトラックをミックスに組み込む準備ができていくというわけさ」

観客と一体になるため 瞑想して2つのベルを鳴らす

ミックス・ダウンの2カ月後、私は喜多郎がツアー・バンドと一緒にリハーサルを行っているロサンゼルス・センター・ステージングを訪れた。喜多郎は彼の“シンセサイザー・コクピット”から指揮をとっていたが、そこでフィーチャーされていたのは、1970年代半ばの古いアナログ・モノ・シンセサイザーのKORG 700Sと、2音ボリのKORG 800DVだ。

「アナログ・シンセにはほぼ近い音が出るデジタル・シンセを作っている会社はたくさんあるけれど、こういった古いシンセにはぬくもりと、1つ1つのサウンドに個性があるんだ」と喜多郎が説明する。さらに彼の回りには左側にサンプラーのCASIO FZ-1とマスター・キーボードとして使用しているKURZWEIL K1200が設置されていた。これらの機材について喜多郎が続ける。

「FZ-1には私の古いアナログ・シンセの音をサンプリングして使っています。何しろすごくいいサウンドだから。でも、古いシンセにはベロシティやボリューム・コントロールが付いていないのでサンプラーで鳴らしているのです。また演奏する際

には、キーボードやMIDIコントローラーなどにペダルを7つも使って音を作っています」

喜多郎の背後には大きな伝統的な和太鼓と直径が約90cmのゴングが置かれているが、これは彼自身が鳴らすためだ。また、エレクトロニック・パーカッションのKORG Wavedrumも2台、ALTERNATE MODE MalletKatと接続してアディショナル・パーカッションとして用意。そのほかにもエレクトリック・シタール、クロマチック・ハーモニカ、ブータンのマウンテン・ホーン、エレクトリック・カリバンなどの楽器をAdrenaLinn IIIを通して演奏していた。

なお、ステージ・モニターはリハーサルでもコンサートの演奏でも一切使用されていなかった。代わりに喜多郎が使用していたのはULTIMATE EARSのインニア・モニターとワイアレス・システムのSENNHEISER EW300で、モニター・エンジニアのルイス・サヌードも同じものを使用。ほかのミュージシャンもインニア・モニターを使っていたが、彼らはSHURE PSM700シリーズを採用していた。

ステージのマイキングは、太鼓用にSHURE Beta 52A、ゴングにはAKG C451Bを用意。ポータル・マイクにはSHURE 58、センター・ステージにある小さな座布団の上に置かれたベルには、AKG C451が2本用いられていた。この2つのベルには特別な意味があるという。

「ショーを始めるとき、観客と一体になるため、瞑想してこのベルを鳴らします。本シリーズにおける寺の鐘と同じ意味を持っているわけです」

アルバムの発売に合わせて11月から始まる“ラブ&ピース”ワールド・ツアーに向けたリハーサルでアルバムのサウンドを再現していた喜多郎がこれからの方向性について話してくれた。

「ときどき、機材の調子が悪いときもありませんが、私らしいサウンドをキープしたいと思っています。アナログ・シンセのサウンドはできるだけ失いたくないんですけど、新しいデジタル・テクノロジーも使っていきたいですね」

Kitaro with Engineers



▶喜多郎と彼のプライベート・スタジオ専属エンジニア、イアン・ユリバーリ。ロサンゼルス・センター・ステージングにて

◀2007年、オーシャン・ウェイ・レコーディングにて喜多郎(左)とエンジニアリングを担当したスティヴン・ミラー



『空海の旅 3』

喜多郎

コロンビア・COCB-53674

9.11同時多発テロに触発された喜多郎が制作を開始した『空海の旅』シリーズの第3作。前2作の舞台、徳島を離れ今作からは最崎崎寺、津照寺など高知県に所在する寺、8カ所の鐘の音を収録している。各曲が鐘の音で始まる本作はアナログ・シンセ・サウンドを中心にシタール、サントール、尺八などの民族楽器が作り出す癒しのサウンドが堪能できる